

<実践報告>

信州大学教育学部・附属小学校の連携による 短期留学生対象の教員養成プログラム開発の試み

山本大貴・大畑健二・高橋 史・伏木久始・酒井英樹・田中江扶・藤田育郎

信州大学学術研究院教育学系

Collaboration Between Faculty of Education, Shinshu University and Affiliated Elementary School to Develop Teacher Training Program for Short-term Exchange Students

YAMAMOTO Hiroki・OHATA Kenji・TAKAHASHI Fumito・FUSEGI Hisashi・

SAKAI Hideki・TANAKA Kosuke・FUJITA Ikuro:

Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	信州大学教育学部と附属長野小学校が連携して実施した短期留学生用の教員養成プログラムの内容と、その成果・課題の報告
キーワード	海外教育実習 教育学部と附属学校の連携 留学プログラムの開発
実践の目的	教員志望の短期留学生に、日本の教育、文化、言語、英語教育法等について学ぶ機会や、小学校での実習の機会を提供し、教員としての資質を高めてもらうこと。
実践者名	執筆者と同じ
対象者	ウプサラ大学教育学部からの留学生（1名）
実践期間	2023年4月～5月
実践研究の方法と経過	大学での授業、附属小での実習、リフレクションなどからなる短期留学プログラムを開発・実施し、対象者へのインタビューにより感想を聞き取った。対象者は、英語は堪能だが日本語の知識はほとんどなかったため、言語面での配慮やサポートが必要であった。よって、個別のカリキュラムの作成、英語による授業実施、通訳役の学生の雇用などにより、それらの課題の解決を図った。
実践から得られた知見・提言	附属小との連携や、言語面の配慮・サポートをすることで、日本語力が低い対象者にも教育学部の強みを活かした質の高い短期留学プログラムを実施することができた。対象者の満足度も非常に高かった。

1. はじめに

現在、グローバル化に対応できる教員の養成が強く求められている(文部科学省 2012)。信州大学教育学部では、グローバルな視座を持つ教員の養成に向けた様々な取り組みを実施している。たとえば、2019年にウプサラ大学(スウェーデン)教育学部と学部間協定を締結し、オンラインでの共修授業や学生の派遣などを行ってきた。新型コロナウイルスの影響もあり実施できずにいたウプサラ大学からの留学生受け入れも2023年4月～5月に初めて実現し、留学生と教育学部生に異文化交流や学びの機会を提供することができた。

グローバル化に対応できる教員を育成するためには、学生を海外に派遣するだけでなく、魅力的な留学プログラムを用意して留学生を受け入れることも重要であろう。しかし、教員養成系学部が留学生を増加させるためには、教育に関心のある留学生のニーズに応えるカリキュラム開発や、日本語力が十分でない留学生への対応など、乗り越えるべきハードルが多くある。本稿は、それらの課題を抱える教員養成系学部が留学生受け入れを行う際の示唆を提供することを目指し、ウプサラ大学からの初の留学生となるWに対して、信州大学教育学部と信州大学教育学部附属長野小学校(以下、「附属小」)が連携して実施した留学プログラムの内容と、その成果・課題を報告するものである。(山本)

2. 留学プログラムの内容

2.1 概要

本実践の対象者である留学生Wは、ウプサラ大学教育学部に在籍する男子学生である。母国のスウェーデンで小学校教員になることを目指している。Wは、母語のスウェーデン語に加え、英語も堪能だが、日本語の知識はほとんどなかった。専門教科の1つが英語であり、信州大学では、日本の教育や文化に加え、英語教育についても学びたいと考えていた。また、大学での授業の受講だけでなく、日本の小学校での教育実習も希望していた。

これらの点を踏まえ、教育学部の留学生受け入れを担うグローバル活性化ワーキンググループの教職員と附属小の教員が議論を重ね、“School Education in Japan I” “School Education in Japan II” “School Education in Japan III” という3つの1単位科目を開設することとした。各科目における授業や実習は、英語で行うか、高い英語力を持つ信州大学教育学部の学生などに通訳を依頼して実施した。概要は以下のとおりである。(山本)

2.2 School Education in Japan I (教育・言語・文化等に関する教養を深める科目)

School Education in Japan Iは、1) 日本の教育・言語・文化などに関する学部の授業の履修(4コマ)、2) 教育学部生を対象とするスウェーデンについての授業の実践(準備を含め2コマ)、3) リフレクション(1コマ)、からなる。また、課題として、各授業や授業実践で学んだことや、それらの学びは将来どのように活かせると思うか等について記述するReflection Essaysの作成を課した。各授業の内容は以下のとおりである。(山本)

(1) 日本の学校教育の今日的状況

本学の教職課程において教育学分野を担当する筆者の本科目での役割は、日本の学校で

教育実習をする外国人学生に対して、日本の教育制度と教育課程の概要を説明すると共に一般的な学校の1日の流れを具体的にイメージできる講義を提供することと考えた。しかし、バックグラウンドの異なる留学生に対しては、国内の学生に提供する資料を英訳しただけでは十分とはいえない。留学生を受け入れる側は、日本社会に「適応」することを求めるよりも、国の違いにより教育実践がどのように異なり、どんな点が共通なのかを考える材料を提供することを重視したいと考えるからである。

そこで、以下のとおり講義を行った。まず、世界地図上に示した両国の位置から地理的条件や社会的条件の2ヵ国比較をしながら、スウェーデンと日本の教育制度の違いを図式化して説明した。次に日本の学校の特徴を捉えた動画が英語音声付きでYouTubeにアップロードされているため、それらの中から3つの動画(①「Characteristics of Japanese schools」・②「Japanese-style education」・③「A day in the life of a Japanese university student」)を厳選し、Wに観てもらった。その内容はよくまとまっているものの、日本の教育における負の側面や学校現場の喫緊の課題などには触れていないため、視聴後に少子・人口減少問題に伴う日本の学校教育の課題や、明治期以来の慣習になっている一斉画一型授業の限界にも触れて、スウェーデン国内の教育課題とは異なる問題解決が求められている実情を説明した。

海外からの短期留学生を受け入れ、教職課程としての授業や教育実習をアレンジする際には、社会的背景の異なる学生の側に立って講義内容を再構成し、互いの国が抱える教育課題を一緒に考えるアプローチが有効であるように感じた。(伏木)

(2) 日本の体育科教育

Wが受講した授業は、小学校体育における教科内容について実技を通して体験的に理解することをねらいとした「体育基礎」である。授業は基本的に日本語で実施し、高い英語力を有する教育学部生が通訳をした。ただし、授業担当者がWに個別指導する際には英語を用いた。

授業内容は、体づくり運動領域の下位領域である体ほぐしの運動であった。この体ほぐしの運動では、誰もが楽しめる手軽な運動を通じた「仲間との交流」がねらいの一つとされる。そこで、“Let’s Communicate in Physical Education Class”というテーマの下、日本の子どもたちに馴染みが深いラジオ体操となわ跳び運動に取り組むこととした。しかしながら、一般的にこれらの運動には、個人での活動あるいは個人で技の達成度を追求する活動といったイメージが付随するであろう。そこで、ラジオ体操における各種の動作を2人組で行う「ペア・ラジオ体操」(図1左)、集団的な技能発揮が要求される「トラベラー」(図1中央)や「ダブル・ダッチ」(図1右)と呼ばれるなわ跳び運動を取り上げた。

授業中、Wは、なわを回すリズムや横一列に並んでいるメンバーの間隔を調整しようと試みていた。運動課題の解決に向けて、受講生が理解しやすい英語を用いて積極的にコミュニケーションを交わす姿が印象的であった。(藤田)



図1 「体育基礎」の授業の様子

(3) 日本語・英語・スウェーデン語の特徴

本授業では、Wの母語であるスウェーデン語のジェンダー(gender)について議論した。ジェンダーというのは名詞を男性か女性か(もしくは中性か)に分類する仕組みのことである。ジェンダーの面白いところは文化にも関係することである。たとえば、同じくジェンダーがあるドイツ語とスペイン語を例にとると、「スプーン」はドイツ語では男性名詞であるが、スペイン語では女性名詞になる。一方、「フォーク」はドイツ語では女性名詞であるが、スペイン語では男性名詞になる(ドイッチャー 2012)。ジェンダーは日本語にも英語にもない文法であるが、ジェンダーはジャンル(genre)と語源が同じであるように、もともとは「分類」を表す。この「分類」という点からいうと、日本語の類別詞(classifier)も同じ機能をもつといえる。たとえば、人間は「人」を使って「3人の学生」のように数えるが、動物は「匹」を使って「3匹の犬」のように数える。このように、日本語は人間か動物かを分類して数えるシステムをもっている。なお、日本語学習者にとっては「ホームラン」や「映画」や「論文」などをなぜ同じ「本」で分類して数えるのが不思議であるとのことである(影山 2011)。本授業では、スウェーデン語のジェンダーと日本語の類別詞を比較することで、Wと有意義な議論ができた。なお、授業は筆者の研究室の学生も参加し、英語で行なった。(田中)

(4) 言語と文化の関係

本授業は、外国語(英語)科の教員免許取得希望者の必修科目の1つである「異文化理解基礎」の1コマであり、Wは教育学部生の受講者約30名と共に受講した。

まず、異文化理解基礎の授業ではほぼ毎回行っている「異文化理解ディスカッション」に参加した。本時のテーマは、アメリカなどでは一般的な「学校を児童・生徒ではなく用務員が掃除すること」であった。児童・生徒が自ら掃除をすることがほとんどである日本ではあまり馴染みのないその慣習の理解を目指し、グループにわかれて英語で議論した。

つぎに、言語と文化の関係に関する講義を英語で行った。たとえば、計8枚の蝶と蛾の写真が貼られたスライドや、計7枚のノウサギとアナウサギの写真が貼られたスライドを見せ、受講者に線を引いてもらった。これにより、「蝶」と「蛾」という語があり、両者を区別する日本人は蝶と蛾の境に線が見える一方、「ノウサギ」と「アナウサギ」は両方「ウサギ」と呼び区別しないことが多いのでその2つを区切る線は見えにくいことを伝えた。

実際、「ノウサギ」と「アナウサギ」を区別するスウェーデン語を母語とする W は、スライドに線を引くことができた。受講者は、母語が違えば、全く同じもの（スライド）が異なって見える可能性があることを実感できたと思われる。その他にも、日本には“rice”にあたる語（稲，コメ，ごはん，ライス）や“boil”にあたる語（煮る，炊く，茹でる）が多くある一方、英語には「牛」を意味する語（cow, cattle, bull など）や「焼く」を意味する語（grill, bake, roast, toast）が多くあることを指摘し、ある文化で重要なものは語彙が細分化される傾向があることを示すなどして、言語と文化の関係の深さを学んでもらった。（山本）

(5) 大学生を対象とする授業実践

School Education in Japan I, III (2.4 参照) の授業で学んできたことを活かし、「異文化理解基礎」の 1 コマを使いスウェーデンについて紹介する授業を行った。『中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム』（文部科学省 2019）は、異文化理解に関する科目の目標 1 つを「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解」することだとしており、授業実践を行う W だけでなく、日本人の受講者にとっても意義のある取り組みになると考えた。

本実践においては、受講者がスウェーデンに関する知識を得て関心を深められるようなプレゼンテーションをするだけでなく、英語の授業としても効果的な内容にすることも目標とした。よって、英語学習者が理解可能な英語を話すこと、英語の理解を助けるスライドを作成すること、ペア・グループワークや W と受講者間でのインタラクションなどの英語を話す機会を設けることなども意識して準備を行った。

授業当日は、スウェーデンの社会、文化、言語等について、わかりやすい英語で、スライドを効果的に活用しながら紹介することができた。また、スウェーデンの気候や福祉などについて学んだ後に、日本との類似点や差異を英語で話すというグループワークの時間を設けるなど、英語力向上に効果的だと思われる活動を行うこともできた。

W の授業後、受講者は「学んだこと」「授業の良かった点」「授業の改善点」を英語で書いて提出した。担当教員も授業に関するフィードバックを書いた。W はそれらを基に自分の授業を振り返り、上手くできた点や改善点などを Reflection Essay に記述した。（山本）

(6) リフレクション

School Education in Japan I の全ての授業 (2.2(1)-2.2.(5))を受講し終えた後に、担当教員 1 名とリフレクションを行った。担当教員は事前に W の Reflection Essays を読み、質問リストを作成した。当日はそれらの質問をし、さらに W の回答にコメントしたり追加質問したりした。特に、抽象的な記述の具体例を挙げてもらい、授業での学びが既存の知識や経験と関連づけられているか確認することに重点を置いた。たとえば、「日本語・英語・スウェーデン語の特徴」の授業 (2.2(3))の Essay に “I also learned that language is more than just a means of communication, it is also a reflection of its culture. The characteristics of a language can reveal insights into a society's values, traditions,

history, and beliefs.”という記述があったため、その例を挙げてもらった。(山本)

2.3 School Education in Japan II (附属小における教育実習)

本科目の目的は、日本の小学校の生活や授業の参観とリフレクションを通して、日本の学校教育に関する理解を深めることである。授業参観では、児童と教師の関わりや教材の工夫、ICT活用などの学習環境についての考察から得た知見を丁寧に振り返り、今後の教育実践にどう活かすかを考えた。附属小での実習では **Reflection Journal** を課題に位置付け、観察実習での児童と教師の関わりを記録し省察した。また、実務家教員からのフィードバックにより本科目の学びを一層深めるための機会とした。なお、実習中は教育学部生などが常に通訳として帯同した。附属小での活動の詳細は以下のとおりである。(大畑)

(1) 附属小での活動

初日のガイダンスでは、教育実習の内容や授業観察について説明を行った。留学生 W との懇談を通して高学年(4 学年以上)学級を中心に、算数、英語、体育、音楽、図画工作科の授業を中心に観察することに決まった。校内での授業日程の調整を実務家教員と附属小の職員で行い教育実習の日程を立てた(表 1)。また、授業観察以外にも低学年との交流会を企画したり、校内放送で自己紹介を行ったりと全学級の児童と交流



図2 児童と留学生 W の対話

する機会を設けた。さらに、放課後の校内研修の時間に附属小の職員との情報交流会や懇親会を行いスウェーデンの学校教育について話し合ったり、教材研究会では互いの教育観や授業観について交流したりした。教育実習後半になると授業参観だけではなく、児童と一緒に活動する機会も増えた(図 2)。

教育実習最終日には児童が感謝の会を企画した。W は所属学級の児童一人一人から手紙やプレゼントを受け取った。ある児童から、「なぜ、教師になりたいと思ったのか」と質問を受けた W は、教育実習での感謝の言葉を伝えた後、次のように自らの夢を児童へ語った。「教師という仕事に誇りを感じています。それは、次世代を担う子どもたちの成長に関わることができる重要な仕事だからです。私は、みなさんと過ごせたことを幸せだと感じています。さらに教師になりたいというモチベーションが上がりました。ありがとう。」児童は、W の表情と言葉に集中して聞いていた。通訳を務める教育学部生から内容を聞くと、教室中に響き渡るほどの大きな拍手が沸き起こった。(大畑)

(2) リフレクション

授業への観察・参加のたびに、クラウド上で共有された文書ファイルを使って 150 語以上の **Journal** 作成を求め、附属小の実務家教員が同量程度のコメントを入力してフィードバックを行った。さらに、**School Education in Japan I** と同様の手続きで、全活動終了後に担当教員 1 名とのリフレクションを行った。リフレクションでは、コメントの中でもわかりにくかった部分の有無と(あった場合)その補足説明、初回から最終回にかけての

表 1 教育実習のスケジュール

期日	実習内容		
5月2日	ガイダンス：校舎案内，教育実習の内容・今後の見通しの確認		
5月9日	5限：学級活動（6年生）	6限：学校参観	放課後：懇親会
5月11日	朝の会（6年生） 3限：英語（4,6年生）	1限：英語（4年生）	2限：英語（3年生）
5月12日	1限：図工（6年生） 4限：英語（6年生）	2限：図工（6年生） 給食・清掃（6年生）	3限：音楽（5年生）
5月15日	1限：算数（6年生） 4限：音楽（3年生）	2限：交流会（1年生）	3限：体育（6年生）
5月17日	給食・清掃（6年生）	5限：交流会（2年生）	6限：研究授業準備*
5月19日	午前：研究授業準備* 6限：学級活動（6年生）	給食（6年生） 放課後：授業研究会*	5限：研究授業*

注：*は School Education in Japan IIIの内容

変化などについて確認を行った。また、抽象的な表現（例：I saw how all students, either by themselves or together with others, experimented with the newspaper and created something from their minds）については具体的なエピソードまたは事象を聞き取り，事実のみが記載されている表現（例：I had a chance to visit some different classes, in e.g., science, social sciences, and home economics.）についてはその意味や体験を聞き取ることで，具体的体験と抽象的意味理解の往来を促した。（高橋）

2.4 School Education in Japan III（附属小での授業実践とその準備）

本科目では，大学の授業で得た英語教育に関する知識・技能を活かし，附属小で英語の授業を実施した。授業後には，授業研究の形式で振り返りを行った。また，大学の授業で学んだこと等については，Reflection Essays にまとめてもらった。（山本）

(1) 日本とスウェーデンにおける小学校英語教育

本授業では，3年生3名と4年生2名，そして留学生 W が参加した。授業は英語で実施し，自己紹介，アイスブレイク活動（英語によるマジック），教育学部生 5 名による日本における小学校英語教育の発表，W によるスウェーデンにおける小学校英語教育の発表，ディスカッションを行った。

日本の小学校英語教育については，教育学部生 5 名が分担して，小学校英語教育の歴史，教育課程（学習指導要領，目標や内容，教科書など），指導方法などについて発表した。必要に応じて，適宜，授業担当者が情報提供を行った。W からは，スウェーデンの英語教育の開始学年，授業時数，目標，活動の例などが紹介された。低学年では英語に親しむことを狙って指導されており，日本の小学校における英語教育との目標に共通性があることが説明された。また，動画教材が充実しており，児童は授業や家庭で視聴できることなどが説明され，実際に動画教材（高学年用）を視聴した。日本の英語教科書と異なり，思春期

の小学生が主人公となっており、学習者の共感を多く得られるような内容になっていた。

Wからの提起により、日本の英語教育がうまくいっていないのはなぜかについて意見交換を行った。教育課程（開始学年や時数）や英語教育の目標などはあまり変わらないのに、成果に大きな違いが見られることについて、学校外の生活における英語の接触量、母語と目標言語との言語的な特徴の違いなどが要因になっているなど、意見交換した。（酒井）

(2) 児童とのインタラクション

本授業では、附属小での授業実践に向けた演習を行った。受講者は、Wと、授業担当者の研究室に所属する英語教育が専門の教育学部生数名であった。

まず、授業担当者が、児童と英語でインタラクションする際に重要な、「児童の発話に好意的なリアクションやコメントをする」、「児童の発話に誤りが含まれていた場合は、修正をして繰り返す（リキャスト）」、「例を挙げたり言い換えたりして英語を理解しやすいものにする」、「児童に質問する前に教師が手本を見せる」などのポイントを解説した。次に、受講者がグループになり、教師役と児童役にわかれて、インタラクションの練習を行った。

さらに、授業担当者が、スウェーデンの小学生に日本について英語で紹介することを想定した模擬授業を行った。その際、日本の首都 (capital city) を教える時に“Swedish capital city is Stockholm. British capital city is London. What is the Japanese capital city?”などと問いかけて“capital city”の意味を理解させる、写真や動画を見せて気づいたことや感想を児童に言ってもらったりクイズを出して答えを考えてもらったりして教師が一方的に話し続ける授業にならないようにする、などの工夫をした。最後に、その模擬授業の参考になった点や、改善点をグループで話し合った。（山本）

(3) 附属小での研究授業

教育実習の最終日には、6 学年のクラスで外国語の授業実践に取り組んだ（図 3）。W は授業参観のリフレクションで得た知見を活かし、児童の興味・関心を高める教材を選定し、話し合い活動を積極的に位置付けた授業を計画した。また、授業構想から、附属小の教員や教育学部生と協議する場を求め、授業の目的や方法について検討した。W は、児童がスウェーデンの文化を知ることを通して日本の文化との共通点や相違点について話し



図 3 実際の授業の様子

合うインタラクティブな授業を目指して実践に取り組んだ。題材はスウェーデンの習慣である「土曜日のお菓子 (Sweden's Saturday-only candy tradition)」を選定した。W が幼少の頃に食べた経験のある菓子の実物を一人一人の児童に準備したり日本の児童が食べている菓子の種類や習慣について理解するために教育学部生に質問したりと熱心に教材研究へ取り組んだ。実際の授業では、W が提示した教材に「どうして土曜日だけなの。毎日、食べたいのに」と児童は興味を示した。また、「土曜日のお菓子」についての話を聞くと、

「でも、土曜日になるとキャンディ代がもらえるならラッキーだね」と日本の生活や習慣と比較しながらスウェーデンの菓子の習慣の意味や背景についての理解を深めていた。こうして児童と W の相互のやりとりを通じた授業実践となった。(大畑)

(4) 授業実践の振り返り

授業後の授業研究会では、附属小学校教員、信州大学教職大学院生、教育学部生、学部教員が参加し積極的な議論が交わされた。W は、学習活動の指示の仕方や想定外の児童の発言に対する自身のコメントについてふり返りながら、インタラクティブな授業に必要な視点を考察した。また、参加者から児童の学習の様子や効果的な指導のあり方についてのコメントを聞くことで、今後の教育実践への意欲を高めていた。(大畑)

3. 留学生へのインタビュー

全授業終了後に、留学体験全体のリフレクションによる学習効果促進と、プログラムの評価・改善のための情報収集を兼ねて、半構造化面接法による 30 分程度のインタビューを行った。インタビューは担当教員 1 名が実施し、①留学の動機、②プログラムの概要、③プログラムでの印象的な体験、④プログラム外での日本での印象的な体験、⑤プログラム全体の感想、の 5 点を必須質問項目として、話の文脈に合わせて追加質問を適宜行った。

留学の動機としては、スウェーデンと異なる部分が多いイメージがある日本で、自分にとって新鮮な体験をすることで、さまざまな文化を知る教師になりたいという思いがあったとのことであった。それに関連して、プログラムでの印象的な体験をたずねたところ、「日本はとても管理的で厳しいイメージがあったが、実際に見た子どもと教育はとてもオープンで自由で、子どもの自主性がとても尊重されていた。むしろ自分自身が子どもに何かを教えようとする態度があるということにも気づけた」と、それまで抱いていた先入観を覆す体験を通して視野が広がった旨の語りがあった。こうしたことは、プログラム内だけでなく、言語面でのサポートを行った教育学部生との交流等でも体験したと報告され、同じ立場にある学部生が留学生のサポートにあたることの教育的意義が示唆された。

意外性はないものの期待通りの体験が得られた例としては、「食」に関する語りが主であった。忙しい留学中の生活でもラーメンなどの食事を楽しめたこと、そうした食の体験がサポート役の学部生や子どもたちとの交流のきっかけとして非常に役立ったことなどから、留学生 W 自身が興味を持って楽しんでいる食文化が、さまざまな文化的背景を持つ人と初めて交流を持つときの W にとっての武器になるとの気づきがあった。「食」に関しては、「言語と文化の関係」に関する大学内講義や、附属小での授業実践においても活用されるなど、多文化交流に関する語りの中で頻繁に出現した。

本プログラムに関する全体的感想としては、W は非常に満足しており、密度の高い経験ができたこと、子どもと附属小からの非常に好意的な受け入れがあったこと、サポート役の教育学部生に助けられたことなどについて、謝意を繰り返し述べていた。(高橋)

4. おわりに

本実践では、教育学部と附属小との連携や、言語面の配慮・サポートにより、日本語力が低い対象者にも教育学部の強みを活かした質の高い短期留学プログラムを実施することができた。その一方で、以下の課題については今後検討していく必要がある。

1 つめは、英語を専門としない留学生を受け入れることになった場合の対応である。今回は対象者の留学生 W が英語を専門の 1 つとする学生だったため、英語で実施可能な英語教育コースの授業の履修が多くなっても問題なかった。しかし、英語教育コース以外の授業を英語で行うのは難しく、内容によっては学生が通訳するのも困難なため、英語以外の教科を学びたい留学生を受け入れる際には既存の科目外で実施する授業（2.2(1)(6), 2.3(2)の授業形式）が増える可能性がある。その場合は、留学生のために実施する授業にも教育学部生の参加を呼び掛け、両者が共に学ぶ機会を確保するなどの対応が必要となる。

2 つめは、複数の留学生を同時期に受け入れることになった際の対応である。今回は 1 名の受け入れであったため、個別のカリキュラムが作成でき、指導も手厚く行えた。しかし、留学生が増えた際にも同様の対応をするには、より多くの教員の協力が必要である。

3 つめは、通訳として参加した教育学部の学生を対象とする研究を実施することである。本プログラムの特徴の 1 つは、教育学部生が留学生と共に附属学校に出向き、通訳として実習に参加することである。この経験は、日本人学生にとっても様々な学びが得られ、さらに自信や動機づけを高められる可能性があるものだといえる。今後、彼（女）らの経験・学び・感想等についても調査し、本プログラムの意義や改善点の発見に役立てたい。（山本）

謝辞

今回の留学生受け入れに際し、信州大学教育学部附属長野小学校の先生方に多大なお力添えをいただきました。深く感謝申し上げます。

文献

- ガイ・ドイッチャー（椋田直子（訳））、2012、言語が違えば、世界も違って見えるわけ、早川書房
- 影山太郎（編）、2011、日英対照 名詞の意味と構文、大修館書店
- 文部科学省、2012、教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）、https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（accessed 2023.9.27）
- 文部科学省、2019、外国語（英語）コアカリキュラムについて、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf（accessed 2023.9.27）

（2023年9月28日 受付）